

『今昔物語集』における動詞句「老ニ臨ム」の性格について

——『法華験記』との関わりを中心に——

青 木 毅

目 次

- 一、はじめに
- 二、問題の所在
- 三、出典文献との比較
- 四、中国の仏書における「臨老（オイニノゾム）」の出現状況
- 五、平安時代の諸文献における「オイニノゾム（臨老）」の出現状況
- 六、『今昔物語集』における「老ニ臨ム」との比較——使用文脈の検討——
- 七、むすび
- 八、おわりに

一、はじめに

いわゆる「出典に左右されない撰者自身の文体」の性格を解明しようとした研究は、山口佳紀博士が、「文体基調」という名称でその存在意義を説かれて以来、諸氏によって行なわれ、様々な説が提出されてきている。⁽¹⁾ただし、いずれの

『今昔物語集』における動詞句「老ニ臨ム」の性格について

説も未だ定説とはなり得ず、諸説が並び立つとも言うべき様相を呈しているといったところが現状であろう。

このような現状をもたらした原因の一つには、アプローチのし方や分析の方法が、ややもすれば固定的になりがちであったということが、存するように思われる。その点では、近年、山本真吾氏・田中牧郎氏・藤井俊博氏らによって、独自の新しい観点を導入することにより、『今昔物語集』の表現に関する従来の性格づけを再検討するというタイプの研究が公にされており、注目される。⁽²⁾ これら新しい観点による研究は、従来の方法では明らかにし得なかつた点が解明される可能性を秘めており、今後の更なる研究成果が期待されるところである。

筆者は、そういった新しいタイプの研究に触発されつつ、以前に、文体を測る指標として動詞句という単位を取り上げ、『今昔物語集』の文体分析を試みたことがある。⁽³⁾ ただし、『今昔物語集』に見られる動詞句は多種多様であつて、一二の動詞句の分析から『今昔物語集』の文体の性格を規定することは、困難であり、また危険でさえある。まずは、『今昔物語集』において特徴的と見られる動詞句の一事について、その性格を明らかにし、その成果を積み重ねていくことが必要であろう。そこで、本稿では、その一階梯として、『今昔物語集』において「老齡ニナル」ことを表す「老ニ臨ム」という動詞句を取り上げ、その性格について、今回考察し得たところを述べてみたいと思う。

二、問題の所在

「老ニ臨ム」という動詞句は、『今昔物語集』に三十二例もの用例を見出すことができる（次頁の表①参照）。

ところが、『今昔物語集』の成立した時期である院政期、ならびに鎌倉期に成立したとされる次掲の説話集においては、その用例を一例も見出すことができないのである。

法華百座聞書抄・江談抄・打聞集・金沢文庫本仏教説話集・観智院本三宝絵詞・唐物語・宝物集・古本説話集・古事談・宇治拾遺物語・閑居友・癡心集・今物語・十訓抄・撰集抄・沙石集

(表①)

内容の類別*	老ニ臨ム	
	句	卷
仏教	2	1
	1	2
		3
		4
俗		5
		6
仏教		7
		8
	1	9
俗		10
		11
仏教	2	12
	1	13
	5	14
		15
	11	16
		17
	1	18
		19
	5	20
	2	小計
31	21	
世		22
	1	23
		24
		25
		26
		27
		28
		29
		30
		31
俗	1	小計
	32	合計

* 池上新一氏作成「今昔物語集構成表」(『今昔物語集宇治拾遺物語必携』昭63、學燈社)に拠る

特に、『法華百座聞書抄』・『打聞集』・金沢文庫本『仏教説話集』・観智院本『三宝絵詞』など、片仮名交じり文という点で、表記様式上、『今昔物語集』と共通性の認められる文献や、『古本説話集』・『宇治拾遺物語』など、『今昔物語集』の説話と母胎を同じくすると見られる説話を含む文献においてさえ、「老ニ臨ム」の用例が見出されないということには、注目されよう。

『今昔物語集』以外の説話集では、鎌倉期成立とされる『続古事談』・『古今著聞集』に各一例用例が見出されるにすぎないのである。

①式部大輔在良トイフ人。三條壬生ニナンスミケル。コレハ天神昔スミ給ケル所ナリ。其後人スムコトナシ。在良申ウケテキタリケリ。夢ニミルヤウ。汝ハキルトモ子孫ハスムベカラズ。在良老ニ臨テ病ツキテ後此家焼ニケリ。夢ノツゲムナシカラズ。ヲソロシキ事也。

②宿執者、天性之所ニ染着也。文武以下諸雜藝、稟^ケ其道^ヲ、思^フ其名^ヲ之者、雖^ド臨^ム老^ニ、難^シ弃^ル捐^ル。人皆有^リ癖。不^レ能^ハ欲^スレ^ル罷。是又前業之令^ル然^ラ歟。

(『続古事談』第四、神社・佛寺)

『今昔物語集』が他の説話集を圧倒する言語量を有しているとは言うものの、院政・鎌倉期の説話集全体における用例三十四例のうち、約九四％に当たる三十二例が『今昔物語集』に集中しているといった見方をすれば、相対的に見ても、

『今昔物語集』における動詞句「老ニ臨ム」の性格について

「老ニ臨ム」は、『今昔物語集』にとりわけ多いと言ふことができよう。すなわち、右のような出現状況を見る限りでは、「老ニ臨ム」は、『今昔物語集』を特徴づける表現形式の一つとして捉えることができるように思われる。

それでは、この「老ニ臨ム」という動詞句は、院政・鎌倉期の説話集の中で、なぜ『今昔物語集』に特徴的に見られるのであろうか。このことは、「老ニ臨ム」という動詞句が、『今昔物語集』成立以前においてどのような文獻に使用されておられ、また、どのような経路を経て『今昔物語集』に取り入れられたかを明らかにすることによつて、解明される問題であらうと思われる。

そこで、以下、『今昔物語集』成立以前の文獻を調査することにより、「老ニ臨ム」の『今昔物語集』への受容のなされ方について、検討を加えることとする。

三、 出典文獻との比較

二で述べたような問題について検討する場合、第一に注目すべき文獻は、やはり、『今昔物語集』の成立に直接関わつたと考えられる出典文獻であらう。そこで、まずは、『今昔物語集』における「老ニ臨ム」について出典文獻との比較を行なうことにより、出典文獻の当該箇所「老ニ臨ム」が認められるか否かを明らかにしておきたいと思う。尤も、「老ニ臨ム」が認められる『今昔物語集』の説話すべてについて、出典が判明しているわけではないので、出典未詳の説話については、同文的な同一話を出典に準じて取り上げ、比較することとした。

さて、「老ニ臨ム」は、出典や同一話の判明している説話に二十六例存しており、それらについて出典・同一話との比較を行なつてみると、次のように分類・整理することが可能となる。

へ1 出典文獻に当該表現（「オイノソム（臨老）」）が見出される場合

① 而ル間、光日聖人漸々老ニ臨マ、愛宕護ノ山ニ移リ住シヌ。其所テニシ日夜ニ法花経ヲ讀誦シテ修行不怠ヌ。

② 臨老移棲愛太子山。妙法卷數及万余部。籠居精進逕數十年。
〔今昔〕卷第十三・第十六
〔法華驗記〕卷上・第二十一

③ 平願、遂ニ老ニ臨ムテ、心ニ思ハク、「此ノ生ハ徒ニ過テ、他界ニ趣カム事、近キニ有リ。今善根ヲ不修スバ、惡趣ニ墮ム事、疑ヒ有ラジ」
歎キ悲ムテ、衣鉢ヲ投棄テ、佛事ヲ營ム。
〔今昔〕卷第十三・第十九

④ 沙門臨老思惟歎念。此生徒過。往他界別在近。即捨衣鉢。勤修仏事。
〔法華驗記〕卷上・第四十

⑤ 其ノ時ニ、佛宣ハク、「(略)一日ノ出家ノ功德、二万劫ノ間、惡道ニ不墮テ、常ニ生テ福ヲ可受シ。最後ノ身ニ人中ニ生レテ財
豊ム。老ニ臨ム世ヲ厭テ出家シテ、道ヲ修テ辟支佛ト成テ其ノ名ヲ毘帝利ト可云シ、廣ク人天ヲ度シ」ト説給ケリ。
〔今昔〕卷第一・第二十二

⑥ 一日出家滿二十劫不墮惡道。常生天上受福自然。最後人中生富樂家財寶具足。壯年已過臨老厭世。出家修道成辟支
佛。名毘流帝梨。廣度天人不可限量。
〔法苑珠林〕卷第二十二、入道篇第十三、引證部第四

〈2〉 出典文献に当該表現(「オイニノゾム(臨老)」)が見出されない場合

a、別の表現が対応する

⑦ 而ル間、尼、漸ク老ニ臨ムテ、只、弥陀ノ念佛ヲ唱ヘテ他念无ク、極樂ニ往生セム願リ。而ルニ、尼、僧都ヲ呼テ、告テ云ク、「我レ、明
後日ニ極樂ニ往生ス。然レバ、今日ヨリ始メテ、不断ノ念佛ヲ修セム思フ」ト。
〔今昔〕卷第十五・第三十七

⑧ 尼衰暮、唯念弥陀。語僧都曰。明後日可詣極樂。此間欲修不断念佛。
〔日本往生極樂記〕三二

* 対応する表現としては、「老後」「老」「臨知命期」「離老病苦」(『法華驗記』)、「長老之後」「及暮年」「暮年」「衰暮」「晚年」
〔日本往生極樂記』)、「七句ニ及フ」(『地藏菩薩靈驗記』)、「老ユ」(『打聞集』)、「老ゆ」(『古本説話集』)、「年老ゆ」(『宇
治拾遺物語』)がある。

b、対応する表現が存しない(▲印は該当する表現が存すべき箇所を示している)

『今昔物語集』における動詞句「老ニ臨ム」の性格について

⑨而^レ間、遂^ニ老^ニ臨^テ、身^ニ重^キ病^ヲ受^テ日^来ラ^テ經^ト云^モ、法^花經^ヲ讀^シ念^佛ヲ唱^ル事^不怠^ズ。

〔今昔〕卷第十二・第三十二)

⑩僧都▲受取重病。其間極久。雖然念仏誦經不退。

〔法華驗記〕卷下・第八十三)

c、対応する表現が存すべき文脈が存しない(●印は該当する文脈が存すべき箇所を示している)

⑪今昔、天竺^ニ提^何長者^ト云^フ人^有ケ^リ。夫^妻共^ニ年^老タ^リ、一^人ノ子^无シ。妻^ニ語^テ云^ク、「天^上・人^間ニハ子^有ル人^ヲ富^人ト^ス、子^无キ人^ヲ劇^キ事^トス。我^レ年^老ニ臨^テ子^无シ。サレバ樹^神ニ可^祈也」ト云^テ祈^ル間、妻^既ニ懷^任シ^ス、長^者喜^ブ事^无限^シ。

〔今昔〕卷第一・第十五)

⑫此長者夫婦共^ニ年^老也^一人^子ニ即^相語^云天^上人^中心^見道^无子^ニ為^劇・●因^之ニ祈^樹神^{之間}已^壞任^長者^喜愛^无限^一

〔注好選〕中・第二十六)

右のような分類に従って出典文献との関係をまとめると、次頁の表②のごとくなる。

この表②によれば、出典の『法華驗記』に二例、同文的同一話の『法苑珠林』に一例、「オイノゾム」と訓読することが可能な「臨老」という字面の存することが知られる。このことから推察すれば、『今昔物語集』における「老ニ臨ム」と『法華驗記』や『法苑珠林』における「臨老」との間には、影響関係を想定することができるように思われてくる。ただし、『法苑珠林』については、周知のごとく、『今昔物語集』の撰者が直接閲覧して説話を形成したところの出典文献ではないと考えられていることから、直接的な影響関係があったとは、考えにくいであろう。

一方、『法華驗記』を出典とする説話においては、出典の当該箇所「臨老」という字面が存しない場合にも、「老ニ臨ム」の使用が比較的多く認められることから、「老ニ臨ム」が『法華驗記』を出典とする文脈にふさわしい表現であったとも想像され、注意される。

(表②)

類別	同文的同一話												
	* 出典文献	注好選	法華驗記	日本往生極樂記	日本靈異記	法苑珠林	釈迦譜	地藏菩薩靈驗記	打聞集	古本説話集	宇治拾遺物語	小計	合計
老ニ臨ム	出典ニ アリ 〈1〉 〈2〉出典ニナシ	a									1	3	3
		b		5	5							6	23
		c	1									2	3

*ここでは、同文的な同一話を出典に準じて扱った。

このように、出典文献との比較による限りでは、『今昔物語集』における「老ニ臨ム」は、『法華驗記』の「臨老」に由来する表現として捉えることができそうに思われてくる。

『今昔物語集』における動詞句「老ニ臨ム」の性格について

(表③) 参考

類別	同文的同一話										
	* 出典文献	三宝感心要略録	冥報記	弘贊法華伝	日本靈異記	法華驗記	日本往生極樂記	俊頼髓腦	宇治拾遺物語	合計	抽稿
病ヲ受ク	出典ニ アリ 〈1〉 〈2〉出典ニナシ	a	1						1	11	「いづゆる『出典に左右される文体』を通して観た『今昔物語集』撰者の文体志向―『癡病』を表す動詞句『病ヲ受ク』『病付ク』の分布の偏りが意味するもの―」(『国文学攷』第一三四号、平成四年六月)に拠る。
		b		14	1	7	5	8		46	
		c	2			1	2	1		7	6

ただし、ここで注意すべきことは、右の表②によれば、出典文献に存する「臨老」をそのまま取り入れたと見られる用例よりも、『今昔』撰者が独自に用いていると見られる用例の方がはるかに多くなっているということである。すなわち、このことから、『今昔物語集』における「老二臨ム」は、『今昔』撰者の積極的な使用にかかると考えられる、いわゆる「撰者自身の用語」として、これを捉えることができると思われるのである。したがって、もう一つの可能性としては、『今昔』撰者が『法華験記』などの出典文献を目にする以前に、既に、「老二臨ム」を自らの使用語彙の中に持っていたということも、有り得ないことではないと思われる。

『今昔』撰者の語彙形成に直接関わったと考えられる主な文献としては、第一に、『今昔』撰者が『今昔物語集』を撰述する上でその多くを利用したであろう中国の仏書、第二に、『今昔』撰者の生きた時代である平安時代の諸文献を挙げることができると思われる。そこで、次に、それらの文献を対象として、「オイニノゾム(臨老)」の出現状況を検討することとする。

四、中国の仏書における「臨老(オイニノゾム)」の出現状況

本項における検討で対象とした文献は、次に示したような、『今昔物語集』の出典や原典とされている文献、『法華験記』の成立に影響を与えたと考えられる文献、そして、平安時代の訓点資料として伝存している文献である。

〈『今昔』の出典関係文献〉 三宝感応要略録・冥報記・弘誓法華伝・釈迦譜・法苑珠林

〈『法華験記』関係文献〉 法華経集験記・法華経伝記・弘誓法華伝(既出)

〈平安時代訓点資料〉 願経四分律(小川本)・金光明最勝王経(西大寺本)・大唐三蔵女奘法師表啓(知恩院蔵本)・地藏十

輪経(東大寺図書館蔵本・正倉院聖語蔵本・知恩院蔵本)・妙法蓮華経玄贊(石山寺本)・弁中辺論(正倉院聖語蔵本)・

佛説太子須陀拏経(石山寺蔵本)・沙弥十戒威儀経(石山寺蔵本)・護摩蜜記(西大寺蔵本)・不空羼索神呪心経(西大

寺本)・南海寄帰内法伝(天理大学図書館・国立京都博物館蔵本)・無量義經(兜木正亨師蔵本)・妙法蓮華經(立本寺本・龍光院蔵本)・大毘盧遮那成仏經疏(高山寺蔵本)・大唐大慈恩寺三藏法師伝(興福寺本)・冥報記(前田本既出)・八字文殊儀軌(広島大学蔵本)・大唐西域記(石山寺蔵本)・新修淨土往生伝(東大寺図書館蔵本)

これらの文献を対象として調査した結果、「オイニノゾム」と訓読することが可能な「臨老」という字面は、『法苑珠林』における用例一例を見出し得たのみであった。その一例とは、三で示したへいへの用例⑥、すなわち、『今昔物語集』の説話と同文的な同一話と認められる『法苑珠林』の説話中の用例一例である。

さて、右の調査結果から、次の二点を指摘することができようかと思われる。

1、中国の仏書においては、「臨老」という字面は、通常見出し難いこと。

2、『法苑珠林』の「臨老」が『今昔物語集』の「老ニ臨ム」に与えた影響は、一例のみの個別的な、しかも間接的な影響にすぎず、それ以上のものではないと考えられること。

右のような状況から推察すれば、『今昔物語集』における「老ニ臨ム」が中国の仏書より直接取り入れられたという可能性は、必ずしも高いとは言えないように思われる。

なお、「臨老」という字面は、『佩文韻府』によれば、

〔杜甫得家書詩〕——羈孤極傷時會合疎

〔許棠冬杪歸陵陽別業詩〕已貧甘什晚——愛間多

(卷四十九、「臨老」の項)

のごとく、中国の漢詩にも見出されるようであり、また、筆者自身の調査によっても、『全唐詩』などから数多くの用例を見出し得ている。

しかしながら、先行研究による限りでは、中国の漢詩と『今昔物語集』との間に交渉があったとする指摘は未だ管見に入らず、したがって、現段階においては、『今昔物語集』における「老ニ臨ム」と中国の漢詩における「臨老」との間

に直接的な影響関係を想定することは、困難であろうかと思われる。この点については、今後の詳細な検討に俟つところが大きいため、ここでは、中国の漢詩における「臨老」の存在を指摘するに留めておくこととしたい。

五、平安時代の諸文献における「オイニノゾム（臨老）」の出現状況

本項では、平安時代の諸文献における「オイニノゾム（臨老）」の出現状況を見てみることにする。⁽⁵⁾

まず、平安時代の〈和歌〉や〈物語〉・日記・随筆〉などの仮名文については、次掲の文献を調査した。

- [1] 和歌 古今和歌集・後撰和歌集・拾遺和歌集・後拾遺和歌集・金葉和歌集・詞花和歌集・千載和歌集・(新古今和歌集)

- [2] 物語・日記・随筆 竹取物語・伊勢物語・土左日記・大和物語・平中物語・多武峯少将物語・蜻蛉日記・宇津保物語・落窪物語・枕草子・源氏物語・和泉式部日記・紫式部日記・夜の寢覚・更級日記・浜松中納言物語・篁物語・狭衣物語・讃岐典侍日記・栄花物語・大鏡・堤中納言物語・とりかへばや物語

その結果、今回の調査では、「オイニノゾム（臨老）」の用例を一例も見出すことができなかった。

ここで注意すべきことは、二格をとり「アル対象ヲ目前ニスル」という意味を表すと考えられる、この「ノゾム（臨）」という動詞自体、仮名文においては、あまり多くは見出されないという事実である。今回の調査で見出すことのできた用例は、次掲のごとく、『宇津保物語』に三例、『源氏物語』に一例、『栄花物語』に一例の計五例に過ぎないのである。

『宇津保物語』(三例)

- ① ^(かゝればか)かくれば、花の鶯えだにさぶらひ、まつ^(つ)のせみいほりにおどろき、山ざくら^(つ)時に^(つ)のぞめり。

(「かすがまうで」・仲頼の和歌序中)

*右の他、歌題中・正頼の会話文中にそれぞれ一例ずつ「時にのぞむ」の用例あり。

『源氏物語』(一例)

②(略)にこりなき心にまかせてつれなくすくし侍らむもいとほかりおほくこれよりおほきなるはちにのそまぬさきに世をのかれなむとおもふ給へたちぬるなとこまやかにきこえ給

〔すま、源氏の会話文中〕

『栄花物語』(一例)

③かるかゆへに経に給はくいつるいきはいるいきをまたすいるいきはいつるいきをまたすたゝ眼のまへにたのしひさりかなしひきたるのみならず又命終にのそむて罪にしたかひて苦にをづ(卷第三十、「つるのはやし」、引用経文中)しかも、それらは、和歌の序文や歌題の中に用いられていたり、男性の会話文や經典の引用文中の用例であつたりして、いずれも、その使用に位相上の偏りが認められるのである。また、それらのうち、用例③と典拠を同じくすると見られる例は、次掲の用例のごとく、漢文訓読文においても見出されるのである。

④故に經に言く。出息は入息を待た不れ。々々(入息)は出息を待た不れと。唯シ眼の前に樂しひ去(り)て哀しひ來(る)のみに非ず。亦命終に臨(み)て罪に隨(ひ)て苦に墮つ。

(最明寺本『往生要集』院政期朱点、卷上、五七ウ5)

右のような状況から推察すれば、この「ノゾム(臨)」という動詞は、いわゆる漢文訓読語に属する用語として認めることができようかと思われる。このような把握のし方がもし妥当であるとすれば、仮名文に「オイニノゾム(臨老)」が見出されない原因の一つには、「ノゾム(臨)」という動詞の有する位相上の性格が大きく関わっていると見えそうである。次に、漢字文における出現状況を示すこととする。ここでは、調査文献を〈古記録〉〈古文書〉〈古往来〉〈伝記〉〈漢詩文〉の各々に分類した上で、今回見出し得た用例をすべて掲げた。

〔3〕古記録 貞信公記・九曆・小右記・権記・御堂関白記・左経記・春記・水左記・帥記・後二条師通記

〔4〕古文書 平安遺文所収文書

『今昔物語集』における動詞句「老ニ臨ム」の性格について

[5] 古往来 雲州往来・和泉往来・高山寺本古往来・東山往来・菅丞相往来・釈氏往来

[6] 伝記 日本靈異記・浦嶋子伝・富士山記・続浦嶋子伝・将門記・日本往生極樂記・法華驗記・玉造小町壯衰書・新猿樂記・傀儡子記・狐媚記・続本朝往生伝・本朝神仙伝・暮年記・遊女記・拾遺往生伝・後拾遺往生伝・三外往生記・本朝新修往生伝・高野山往生伝・念仏往生伝

『法華驗記』(四例)

① 不誦法華經。不修行一乘。臨老後始誦法華經。信帰一乘。乃至依於定惠薰修。頭密修行。(卷上・第五)

② 占居梅谷。数年隱居。中関白殿北政所特以帰依。日供衣服厚以奉獻。臨老移棲愛太子山。妙法卷数及万余部。籠居精進逕数十年。(卷上・第二十一)

③ 沙門臨老思惟歎念。此生徒過。往他界別在近。即捨衣鉢。勤修仏事。(卷上・第四十)

④ 臨老受病。人々勸進令唱弥陀。令誦法花。振頭不受。更不念仏。又不誦誦。及数十日。臨最後病惱稍愈。(卷中・第六十二)

『後拾遺往生伝』(一例)

⑤ 漸臨老後。依孝子謂。住東坂本。以承德年中。出家受戒(法号阿妙)剃髮之夜。燈下見影。落涙数行。人怪問之。答曰。欣悦深故也云々。(二五)

[7] 漢詩文 凌雲新集・文華秀麗集・経国集・遍照發揮性靈集・都氏文集・田氏家集・菅家文章・菅家後集・雜言奉和・粟田左府尚齒会詩・扶桑集・本朝麗藻・江吏部集・侍臣詩合・殿上詩合・本朝文粹・江都督納言願文集・朝野群載・本朝統文粹・高山寺本表白集・本朝無題詩・法性寺入道殿御集

『本朝文粹』(四例)

⑥ 臨老居^{カエシセト、マ}官官^{ト、マ}俸薄^{ト、マ}。一兩^{カエシセト、マ}僮僕不^レ肯^レ留^レ。

(卷第一、源順、無尾牛歌)

⑦安^カ・勅^シ氏^シ之^ノ臨^ル。老^ロ・相^サ之^ノ撲^ツ難^シ弁^ヘ其^ノ師^ヲ傳^フ。(卷第三、邑上御製、弁散樂)

⑧臣^シ・病^ヤ臨^ル老^ロ倍^ヘ。(音去濁)・毫^{モウ}逐^ツ日^ニ加^ハ。(反)。(卷第四、後江相公、同公辭攝政准三宮等表)

⑨于^ニ時^ニ・百^{ヒャク}花^カ争^ヒ之^ヲ開^ケ・群^{クニ}香^{カウ}四^シ赴^ル。(中略)我^ガ等^ト臨^ル老^ロ遇^フ此^ノ花^ノ時^ト。(反)。(卷第十、後江相公、陪上州大王臨水閣賦香亂花難識詩序)

『本朝統文粹』(三例)

⑩夫^レ臨^ル老^ロ致^ス事^ヲ。俗^ノ士^ノ之^ノ前^ニ蹤^ヲ。依^リ病^ヲ辭^シ官^ヲ。人^ノ臣^ノ之^ノ常^ニ習^ス。緇^ニ素^ニ雖^モ異^ナ。意^ノ趣^ノ惟^ニ同^シ者^ナ歟^ク。

⑪乘^リ星^ノ槎^ヲ而^シ欲^ス歸^ル。敦^ニ基^ニ材^ニ幹^ニ疎^ニ而^シ臨^ル老^ロ。徒^ニ類^ニ櫟^ニ社^ニ之^ノ樹^ヲ。榮^ニ耀^ス少^ク而^シ負^フ春^ヲ。愁^ニ翫^ニ藜^ニ祠^ニ之^ノ花^ヲ。(卷第五、菅定義朝臣、重請罷僧正延曆寺座主并法成寺別當惠心院檢校職才状)

⑫明^ニ衡^ニ學^ニ藜^ニ床^ニ而^シ臨^ル老^ロ。競^ニ陰^ニ幾^ニ年^ヲ。況^ニ李^ニ部^ニ而^シ隔^ル榮^ヲ。逢^フ春^ノ何^ノ日^ヲ。(卷第八、藤原敦基朝臣、七言、春陪吉祥院聖廟同賦櫻花殘古社詩一首)

『本朝無題詩』(二例)

⑬迎^フ晴^ニ庭^ニ躡^リ千^ニ里^ノ雪^ヲ。臨^ル老^ロ鬢^ヲ添^フ一^ニ握^ニ霜^ヲ。少^ク日^ヲ優^ニ遊^ス猶^モ少^ク味^ヲ。今^ノ秋^ニ不^レ耐^フ七^ノ旬^ノ腸^ヲ。(卷三、大江佐國、種月詩)

⑭臨^ル老^ロ多^ク病^ヲ是^レ常^ニ談^ス。四^ノ種^ノ法^中已^ニ盡^ス。宿^ニ霧^ニ少^ク晴^頭尚^モ重^シ。浮^ニ雲^不繫^レ命^難堪^シ。(卷五、大江匡房、病中閑吟)

右の調査結果によれば、「オイニノゾム(臨老)」が見出された文献は、「伝記」類に属する『法華驗記』・『後拾遺往生伝』、ならびに、「漢詩文」類に属する『本朝文粹』・『本朝統文粹』・『本朝無題詩』であって、比較的限られたジャンルの文献に集中して出現していることが知られるのである。

六、『今昔物語集』における「老ニ臨ム」との比較——使用文脈の検討——

前項での検討により、平安時代においては(『今昔物語集』を除く)、『法華験記』を含め、少なくとも五文献において、「オイニノゾム(臨老)」の用例の存することが明らかとなった。本項では、それらの文献において見出された「オイニノゾム(臨老)」と『今昔物語集』における「老ニ臨ム」とを比較し、使用される文脈に共通点が認められるか否かについて検討を加えることとする。なお、この検討においては、作品の成立の先後関係が問題になろうかと思われるが、『今昔物語集』の成立年代が必ずしも明らかではないため、ひとまず、先の五文献すべてを検討の対象に含めることとする。まず、『法華験記』以下の平安時代の漢字文に見出された「オイニノゾム(臨老)」がどのような文脈で使用されているかを整理して示すと、次のようになる。

- 〈一〉「老齡ニナツテ」(最期の時に備えて) 仏道修行に励んだ ①②③
- 〈二〉「老齡ニナツテ」病氣になった・病氣が重くなった ④⑧⑭
- 〈三〉「老齡ニナツテ」出家した ⑤
- 〈四〉「老齡ニナツテ」政治的勢力が衰えた ⑥
- 〈五〉「老齡ニナツタ今」誰が後を継ぐのか ⑦
- 〈六〉「老齡ニナツテ」花の咲き乱れる美しい光景に出会った ⑨
- 〈七〉「老齡ニナツテ」官職を辞する ⑩
- 〈八〉大した働きも出来ずに「老齡ニナツタ」 ⑪
- 〈九〉貧しい生活の中で学問に励んで「老齡ニナツタ」 ⑫
- 〈十〉「老齡ニナツテ」白髪が増えた ⑬

これによれば、様々な文脈において「オイニノゾム（臨老）」が用いられていることが知られ、特定の文脈に限って用いられるというような傾向性は、特に認められないようである。

次に、『今昔物語集』における「老ニ臨ム」が、右に整理したへ一〇〇へ十〇の文脈のうち、いずれの文脈で用いられているかを分類して示すと、次のようになる。

へ一〇の文脈（老齡ニナツテ、仏道修行に励んだ）と一致する例（十五例）

※1・2は『法華験記』の「臨老」をそのまま取り入れた例である。

1 而ル間、光日聖人漸ク老ニ臨テ、愛宕護ノ山ニ移リ住シテ。其ノ所ニテ、日夜ニ法花経ヲ讀誦シテ修行不怠ズ。（卷第十三・第十六）

2 平願、遂ニ老ニ臨テ、心思ハク、「此ノ生ハ徒ニ過テ、他界ニ趣カム事、近キニ有リ。今善根ヲ不修スバ、惡趣ニ墮ム事、疑ヒ有ラジ」歎

キ悲ムテ、衣鉢ヲ投弃テ、佛事ヲ営ム。（卷第十三・第十九）

3 亦、哀ノ心深ク智リ弘シ。草木ニ付テモ此レヲ敬ヒ、何况ヤ、生類ヲ見テハ佛ノ如クニ禮拜ス。老ニ臨ムト云モ、身ニ病无クシ、只偏ニ、生

死ノ无常ヲ厭ヒ悲ムテ、法花経ヲ讀誦シテ淨土ニ生レム事ヲ願フ。（卷第十三・第二十五）

4 而ル間、遂ニ京ニ留テ大宮ト□□ニ住テ有ケリ。漸ク年積テ老ニ臨レ、世ノ中ヲ哀レニ无端ク思テ、殊ニ道心□ケレ、聊ニ房ノ具ナド

有ラズ、投弃テ、阿彌陀佛ノ像ヲ造リ奉テ、法花経ヲ寫シ奉テ、四恩法界ノ為ニ供養シツ。（卷第十五・第十二）

5 而ル間、尼、漸ク老ニ臨ムテ、只、弥陀ノ念佛ヲ唱ヘテ、他念无ク、極樂ニ往生トム願ヒケテ、而ルニ、尼、僧都ヲ呼テ、告テ云ク、「我レ、明

後日ニ極樂ニ往生ス。ト然レバ、今日ヨリ始メテ、不断ノ念佛ヲ修セム思フト。（卷第十五・第三十七）

へ二〇の文脈（老齡ニナツテ、病氣になつた・病氣が重くなつた）と一致する例（九例）

6 今昔、佛ノ御父迦毘羅國ノ淨飯大王、老ニ臨テ、病ヲ受テ日来経ル間、重ク惱乱シ給フ事无限シ、身ヲ迫ル事、油ヲ押スガ如シ。

今ハ限リト思シテ、御子ノ釋迦佛・難陀・孫ノ羅睺羅・甥ノ阿難等ヲ不見テ死ナム事ヲ歎キム給ヘリ。（卷第二・第一）

『今昔物語集』における動詞句「老ニ臨ム」の性格について

7如此ク勤ム行テ、年来ヲ経ルニ、真頼老ニ臨テ身ニ病有テ、既ニ命終ラム為ル日、弟子長教ト云フ僧ヲ呼ビ寄セテ、告テ云ク、「我レ、必ズ、今日死ナムト而ルニ、汝、未ダ、受ケ不學ザル金剛□ノ印契・真言有リ。其レ、速ニ、可教シト云テ、即チ、授ケ畢ヌ。」

(卷第十五・第十三)

8而ル間、年、老ニ臨テ、身ニ重病ヲ受テ、日来、悩ミ煩テ既ニ死ナム為ル程ニ、數ノ僧ヲ請ジテ、法花経ヲ令轉讀テ、病ノ瘳ム事ヲ令祈ムト云ヘド、日来ヲ経テ、遂ニ死ヌ。

(卷第十五・第四十六)

9而ルニ、祥蓮、齡既老ニ臨テ、身ニ重病ヲ受テ、日来ヲ経テ死ヌ。
10此ヲ年来ヲ経ルニ、僧、既老ニ臨テ、身ニ病ヲ受テ、遂ニ命終ラム為ル時ニ、弟子ヲ呼テ、告テ云ク、「我レ死テ後、三年ニ至マデ、此坊ノ戸ヲ開ク事无カレ」云テ、即チ死ヌ。

(卷第十七・第三十一)

11其ノ時ニ、佛宣ハク、「(略)一日ノ出家ノ功德、二万劫ノ間、悪道ニ不墮スシ常ニ天生テ福ヲ可受シ。最後ノ身ニ人中ニ生レテ財豊ム。老ニ臨テ世ヲ厭テ出家シテ、道ヲ修テ辟支佛ト成テ其名ヲ毘帝利ト可云シ、廣ク人天ヲ度シ」ト説給ケリ。

(卷第二十・第二十四)

12年漸ク老ニ臨テ、攝津ノ國ノ豊嶋ノ郡ニ多ト云フ所ニ家ヲ造テ籠居ケリ。(中略) 蠅ニ不翔テスシ、明バ、守、夜ヲ睞ス程ニ心モト无ク思テ、明ニ、湯浴テ疾ク可出家キ由云ヘル、三人ノ聖人極テ貴ク云テ勸テ令出家シメ。

(卷第一・第二十二)

13如此ク為ル間、此ノ人年漸ク老ニ臨ヌ。(中略) 其ノ後、妻子ニ向テ此ノ夢ノ事ヲ泣ク語テ、我レハ、忽ニ貴キ山寺ニ行テ誓ヲ切テ法師ト成ヌ。

(卷第十九・第八)

14而ル間、漸ク年積テ老ニ臨ム時ニ、法師ニ成テ、西ノ京ノ蒙ニ住ム間、家ノ隣ニ有ケル人、俄ニ死ケレバ、此ノ敦行入道、此ヲ訪ガム為ニ、彼ノ家ノ門ニ行テ、其ノ死人ノ子ニ會テ、祖ノ死間ノ事共ヲ訪ヒ云ニ、其ノ子ノ云ク、

〈四〉の文脈(老齡ニナツテ、政治的勢力が衰えた)と一致する例(一例)

(卷第二十・第四十四)

15 而ル間、漸ク世モ末ニ成リ、宮ノ御年モ老ニ臨マセ給ヒバ、今ハ殊ニ參ル人モ无シ。

(卷第十九・第十七)

〈五〉〈十〉の文脈と一致する例(各〇例)

〈十一〉一〇のいずれの文脈とも一致しない例(五例)

16 妻、此ノ事ヲ聞テ涙ヲ流メ、事、雨メノ如ク答ヘテ云ク、「人ノ子ヲ思フ事ハ、佛モ一子ノ慈悲ソトコ譬ヘ説キ給ヘレ。我レ、漸ク老ニ臨テ適マ一人ノ男子ヲ儲リ。懐ノ内ヲ放テツツ猶シ悲ノ心難堪シ。何況ヤ、遙ナル山將行テ埋ムテ還ラム事ヲ可譬キ方モ不思ネ。」(略)ト。

(卷第九・第一)

17 今昔、弘法大師、真言教諸ノ所ニ弘メ置給テ、年漸ク老ニ臨給テ程ニ、数ノ弟子ニ、皆、所々ノ寺ヲ譲リ入給テ後、「我ガ唐ニシテ擲ゲシ所ノ三鉛落ラム所ヲ尋ムト思テ、弘仁七年ト云フ年ノ六月ニ、王城ヲ出テ尋ヌルニ、大和國、宇智ノ郡ニ至テ一人ノ獵ノ人ニ會ヌ。

(卷第十一・第二十五)

(注記)

・?印は、必ずしも文脈レベルの一致とは言い難く、その項目に分類することが躊躇される用例であることを示している。
・用例数の合計が三十五例となっているのは、〈一〉〈二〉の両方の項目に属している用例が三例存するためである。

分類の結果、最も多くの用例が属している文脈は〈二〉であり、次いで〈三〉〈四〉の順となっている。

なお、このことから、『今昔物語集』においては、〈五〉〈十〉の文脈で用いられた例が一例も認められないことが知られ、したがって、少なくとも、『本朝統文粹』の用例とは、文脈上の共通点は認められないことになる。

さて、〈一〉の文脈は、『法華験記』における用例三例(①②③)から帰納された文脈であり、『今昔物語集』において、それと同様の文脈で用いられた用例が最も多く認められることには、注目される。また、〈二〉の文脈は、『法華験記』・『本朝文粹』・『本朝無題詩』における用例(④⑧⑩)に共通して認められた文脈であるが、『病氣ニナル』または『病氣ガ重クナル』ことを表す表現それ自体に注目した場合、『今昔物語集』における用例九例中八例まで(用例7以外)が「病

『今昔物語集』における動詞句「老ニ臨ム」の性格について

ヲ受ク」という表現を用いており、『法華驗記』における「受病(ヤマヒヲウク)」と一致しているのである。なお、この「病ヲ受ク」についても、先掲(二四五頁)の表③に見られるように、『法華驗記』の表現をそのまま取り入れたと見られる用例が他の出典文献の場合と比べて多くなっているものであり、注目される。

それに対して、(二二)の文脈は、『後拾遺往生伝』における用例(⑤)に認められた文脈であるが、そこに分類された『今昔物語集』の用例を子細に検討すると、『後拾遺往生伝』との関わりは、必ずしも認め難く思われてくるのである。例えば、用例11は、三で述べたように(一)の用例⑤と同一例、直接的には、『法苑珠林』の説話と母胎を同じくすると見られる説話を含むある出典文献における用例を踏襲したと推定される例であるし、用例12・13は、文脈上的一致というよりは、むしろ、ストーリーの結末において出家を遂げているといった程度の共通性であり、用例14は、「出家スル」ことを表す表現としては「出家ス」ではなく「法師ニ成ル」であつて、表現上の共通性は認め難いのである。このように考えてくると、(二三)の文脈で用いられた『今昔物語集』の用例を『後拾遺往生伝』との関わりにおいて捉えることには、いささか無理があるように思われる。

また、(四)の文脈は、やや大括りな捉え方をした嫌いがあり、もつと微視的なレベルで文脈を比較した場合、『本朝文粹』の用例⑥と『今昔物語集』の用例15との間に共通点を見出すことは、むしろ、困難であろうかと思われる。すなわち、『本朝文粹』の用例は、「年老い官禄少く一二の僮僕すら長く吾に事ふるを肯せず」という文脈⁽⁶⁾で用いられた例であつて、『今昔物語集』の用例とは、いささかニュアンスを異にしているのである。

以上のように見てくると、『今昔物語集』における「老ニ臨ム」は、『法華驗記』における「臨老(オイニゾム)」と文脈上の共通点が色濃く認められる一方、『法華驗記』以外の文献における用例とは、文脈上の共通点は必ずしも認め難く思われる。すなわち、使用文脈の上から見ても、『今昔物語集』の「老ニ臨ム」と『法華驗記』の「臨老(オイニゾム)」とは、密接な関係を有していると言えそうに思われるのである。

七、むすび

これまでの検討結果より判断すれば、『今昔物語集』における「老ニ臨ム」の事例は、直接的には、『法華験記』からの影響として捉えることができるように思われる。ただし、その「影響」の内実については、表現それ自体の影響と用法（使用文脈）上のみの影響との少なくとも二つの場合が考えられる。「老ニ臨ム」の事例をそのいずれの場合と見做すことができるかについては、「老ニ臨ム」が『今昔』撰者にとつて既知の表現であつたか否かということと深く関わる問題であるため、直ちに明らかにすることは困難であろう。この問題については、類例の検討を積み重ねる過程において、解明の糸口を模索していくことが必要であると考えている。

今回の検討結果を右のように捉えることができるとすれば、更に、次のような考察が可能となるように思われる。先に、三での検討において、『今昔物語集』における「老ニ臨ム」は、『今昔』撰者の積極的な使用にかかると考えられる、いわゆる「撰者自身の用語」として捉えることができると考えられた。とすれば、この「老ニ臨ム」は、『法華験記』の用語が『今昔物語集』の撰者の用語に直接的な影響を与えた事例として捉えることが可能であり、したがつて、藤井俊博氏が示唆されたように、⁽⁷⁾『法華験記』の語彙が『今昔』撰者の語彙形成に関わっているらしいことが考えられてくるのである。

なお、このように、『今昔物語集』における「老ニ臨ム」が『法華験記』という特定の文献からの影響として捉えられることにより、「老ニ臨ム」が院政・鎌倉期の説話集の中で『今昔物語集』に特徴的に見られるという現象も、説明が可能となるように思われる。

八、おわりに

以上、本稿では、『今昔物語集』における「老二臨ム」という動詞句の性格を明らかにするという方向で検討を加えつつ、『法華験記』の用語と『今昔物語集』の用語との関わりという問題について、若干の考察を試みた。藤井俊博氏が注目されているように、『今昔物語集』の文体が『法華験記』の文体とどのように関連するかということは、『今昔物語集』の文体研究上、興味深い問題であり、今後更に追求すべき重要な研究課題の一つであろうと思われる。動詞句という単位を利用した今回の考察が、この問題を解明する一階梯ともなれば、幸いである。

注

- (1) 佐藤武義「今昔物語集の語彙と語法」(昭五十九、明治書院)、山本真吾「今昔物語集に於ける『速』の用法について」(鎌倉時代語研究)第十一輯、昭六十三、武蔵野書院)他、参照。
- (2) 山本真吾「今昔物語集に於ける『速』の用法について」(鎌倉時代語研究)第十一輯、昭六十三、武蔵野書院)、田中牧郎「今昔物語集から見た『訓点特有語』の一面——動詞を中心に——」(『文藝研究』第百二十集、平元・一、日本文芸研究会)、同「平安和文の中の漢文訓読語をめぐって——『訓点特有語』とされる動詞の考察——」(『学苑』第六百二号、平二・一)、藤井俊博「『事限り無し』考」(『京都橘女子大学研究紀要』第十七号、平二・十二)、同「今昔物語集の翻訳語について」(『国語語彙史の研究』十一、平二、和泉書院)、同「今昔物語集の文体と法華験記——『更ニ無シ』をめぐって——」(平成四年度国語学会秋季大会口頭発表、十月二十五日、大分大学)等。
- (3) 拙稿「いわゆる『出典に左右される文体』を通して観た『今昔物語集』撰者の文体志向——発病をを表す動詞句『病ヲ受ク』(病付ク)の分布の偏りが意味するもの——」(『国文学攷』第百三十四号、平四・六)
- (4) 山口佳紀「今昔物語集の形成と文体——仮名書自立語の意味するもの——」(『国語と国文学』第五百三十四号、昭四十三・八)、宮田尚「今昔物語集出典研究の点検——巻七第十六話のばあい——」、同「今昔物語集と法苑珠林——巻六第二十話の定着をめぐって——」(『日本文学研究』(梅光女学院大)第四号、第五号、昭四十三・十一、昭四十四・十二)、高橋俊夫「今昔物語集天竺部出典の再検

討——その二、法苑珠林——」（『国学院大学大学院紀要』第五輯、昭四十九・三）等。

(5) 山本真吾「『龍蹄』小考——漢語受容史研究の一問題として——」（『広島大学文学部紀要』第四十八巻、平元・一）を参考にした。
なお、奈良時代の諸文献においては、次掲の文献を調査した限りでは、「オイニノソム（臨老）」の用例を見出し得なかつた。

古京遺文・続古京遺文・法華義疏・古事記・日本書紀・風土記・懐風藻・万葉集・寧楽遺文所収文書

(6) 柿村重松註『本朝文粹註釈（上冊・下冊）』（大正十一、内外出版株式会社）に拠る。

(7) 注2の藤井俊博文獻。

*用例を検索する際、索引の公刊されている文献については、それを利用した。紙幅の都合上、一々記せないが、その学恩には深謝申し上げたい。

(付記) 本稿は、平成四年度広島大学国語国文学会秋季研究集会（十一月二十一日、広島大学）における口頭発表を基にまとめたものである。発表会の席上、江端義夫・竹村信治・山本秀人・柚木靖史の各先生より、貴重な御教示を賜った。また、成稿に際しては、小林芳規先生より懇切な御指導を賜った。ここに記して心より御礼申し上げる。